



# 伊奈波さん

No9

平成19年  
6月号



外宮に曳き入れられた第62回式年遷宮御用材



## めぐりきた本

伊奈波神社  
宮司 東 道人

水無月のみなぎる緑も鮮やかに色彩深く、稲葉山も染められている。岐阜市の中心に悠然と歴史の彼方から岐阜に住む人びとを見守ってきた緑山である。氏子崇敬者の皆さまもこの御山を仰ぎつつ、日々を平穩にお過ごしのこと存じ上げます。

ところで、岐阜県に先人の人びとが心血を注ぎ、研鑽を重ね編んだ郡史が遺されている。それらは『岐阜縣益田郡誌』『岐阜縣飛騨郡大野郡史』『揖斐郡志』『不破郡史』『惠那郡史』『山縣郡志』『養老郡志』『本巢郡志』『美濃國加茂郡誌』『美濃國稲葉郡志』などがある。まさに岐阜県地方史の貴重な史料本と言わねばならない。そのなかでも入手できなかった一冊『美濃國加茂郡誌』（岐阜縣加茂郡役所・大正十年三月三十日刊）が東京神田の古書目録のなかの一冊に加えられているのを見て、早速に注文したところ郵送されてきた。表紙は彼方此方に転売されたためか、色あせ、摩り切れたものであった。本の上段（天・頭の部分）に「西白川尋常高等小学校」と墨書され、一枚の剥れた赤線ラベルが貼ってある。眼を凝らし読むと四角枠の右の印字は読み採れないが、その次に「番號」「購入・大正一〇年八月一日」と数字が書かれ、「西白川尋常小学校圖書」と薄らと読むことができる。表紙を捲ると「大正十年八月一日・岐阜縣加茂郡役所ヨリ寄贈」と記し、捺印されている。まさに、この本は当時、西白川尋常小学校が架蔵していたことが知られよう。大正十年（一九二一）であるから、八六年前である。現在、西白川村は存在しないが、明治二二年（一八八九）七月一日、中川村、水戸野村、和泉村、広野村、河岐村、白山村と合併し西白川村と改称した。同村は昭和二八年（一九五三）四月、白川町となり、校名も白川小学校と改められたと言われている。

このように、一冊の『美濃國加茂郡誌』が八六年の長旅で東京古書店に辿り着き、再び美濃國に復還したありさまを偲ぶとき、本にも命があり、運命を背負いながら生きていくことに感動したのである。何げなく見つめる本にも命の鼓動があり、人々に購い求められる一つの商品と言えようが、物を大切に育てたいと思わずにはいられない。



左 伊奈波神社 右 金神社の神輿

四月七日(第一土曜日)に神幸祭が斎行された。淡い緑に包まれた稲葉山をゆつくりと動きたした御鳳輦(神輿)は御妃「淳熨斗姫命」をお祀りする金神社、第一皇子「市牟雄命」をお祀りする檀森神社を巡拝し、岐阜市内氏

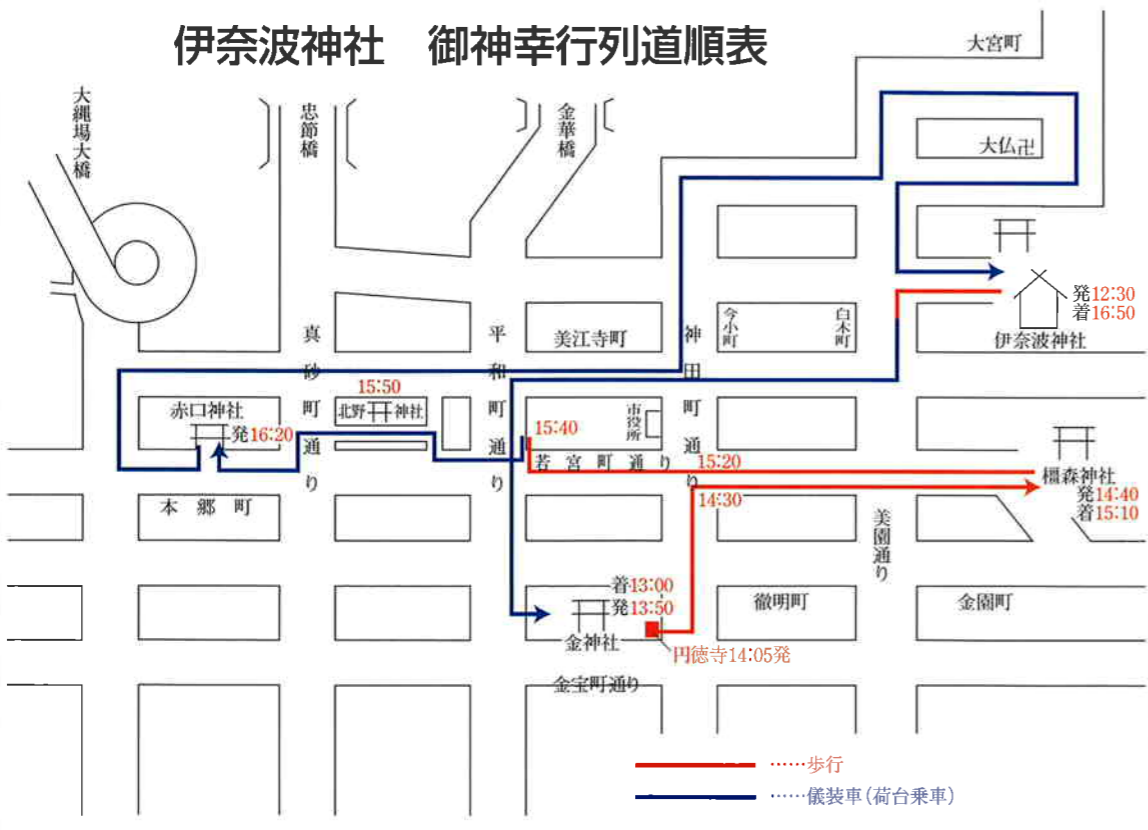
# 伊奈波神社・金神社 神輿ともに歩む

子区域を巡行した。

本年は、金神社と協力の上、市内目抜き通りである神田町通りを渡御。二社の御鳳輦が相並び、道々を雅楽を奏で、古式のままにご巡幸なされる様子は、岐阜の道行く人びとの足を止め、魅了してやまなかった。

これは神幸祭始まって以来初めての事で、岐阜まつりに新たなページが刻まれた日でもあった。金神社の御鳳輦とは神田町で別れ、檀森神社、北野神社、赤口神社と巡拝。道中小雨にも見舞われたが、無事に終え、午後五時還幸祭が斎行された。

## 伊奈波神社 御神幸行列道順表



# 一年に一度の例祭



記念撮影

岐阜まつりで親しまれている当社例祭が、桜が満開に咲きほころ四月五日、献幣使に本年は岐阜県神社庁長宇都宮精秀氏を迎え、責

任役員・総代・崇敬者一〇〇名余りが参列し、盛大に斎行された。神社本庁より「本庁幣」を賜り、氏子の皆様からの初穂料「氏子幣」が総代の河合慶太郎氏より神前に奉られ、皇室安泰と氏子崇敬者をはじめ皆様が何事もなく無事平穩に暮らせるよう願った。祭典終了後、社務所前において記念撮影。参集殿で直会が執り行われた。

現在例祭は、四月五日に斎行されているが、明治初年までは、三月三日に斎行されていたようである。これは伊奈波神社略誌に

当社例祭のこと、岐阜祭として四隣に著聞する。岐阜誌略に「往古は厚見郡中として、毎年三月朔日より六日迄勤むる所、社領没落し文祿年中より廢れ、慶長年中岐阜町中より車二、十四輛渡りしとなり。亦略して今三月三日に社頭にて軽き車二輛しばらく飾り祭禮とす。」また、慶長十八年の社役之恒規に「正月朔日神殿の正面に白餅を供へ、其刻大床にて神

## 例祭

一年に一度神社にとって最も尊重すべき祭礼。祭神または神社にとって縁のある日に執り行う大祭。明治の神祇制度において、官幣社以下村社に至るまで勅使または幣帛供進使が参向し、「幣帛」を奉っていた。戦後、国からの幣帛供進制度は廃止されたが、神社本庁が引き継ぎ、全国神社の例祭に献幣使を参向させ、「本庁幣」を奉って祭典が行われている。

と記され、明治初年まで恒例三月三日であった。同六年新曆施行以来四月五日に改めたと記されており、三月三日が例祭日であったことが察しられる。

# 雨にも負けず 宵宮行なう

宵宮実行委員会が中心となり、太鼓奉納、山車曳き揃え、神輿奉納、仕掛け花火でフィナーレを飾る宵宮。神幸祭途中から降り出した雨は、止む様子もなく雨の中の開催となった。太鼓奉納は、雨のため中止となったが、各町内を巡行した山車四輦が、踊山車、若戎車、清影車、安宅車の順に神社下広場に曳き入れられ、当社神職より祓いをうけた。すべての祓いが終了すると同時に金華神輿や女神輿心女などの神輿が「セイヤ！」



清影車

「セイヤ！」の掛け声とともに威勢よく練り込まれるとムードは一転。雨などもろともせず、広場狭しと縦横無尽に動き廻り、総練り後、神輿コンテスタの審査に入り見事「岐阜陸」が優勝した。翌日は晴天で各山車の展示があり、からくりが上演された。

# 岐阜まつりを 告げる大幟まつ



神社下広場に立てられた大幟

三月二十九日。四月五日の例祭を前に長さ九メートル・幅九〇センチの大幟三十二本(伊奈波神社名二十八本・大黒社名二本・黒龍社名二本)が境内に立てられた。長年にわたり風雨に晒された幟は、破損が著しく、役員・総代と協議をし、新たに関係者各位より御奉納賜った。奉納者は次の通り。

- 伊奈波神社名  
岡本太右衛門・尾関秀太郎  
國井 敏明・桑原 善吉  
河合慶太郎・後藤 直剛  
西野 洋一・西川 長正  
川島 和男・高木 幹雄  
安藤 喜一・松原 通夫  
大熊 利宏・藤澤 眞一  
増田 康壽・佐藤泰一郎  
加藤政之助・井上 文郎  
立木 茂雄・篠田 憲幸  
中矢二三男・深貝 力  
吉位 貞造・末永 至  
岐阜ロータリークラブ  
岐阜ライオンズクラブ  
岐阜新聞社岐阜放送  
中日新聞社岐阜支社
- 大黒社名  
近藤 貢・山口志めを
- 黒龍社名  
若山喜久子・三矢久二子  
村瀬 上氏・村瀬 健  
(順不同 敬称略)

# 好天に恵まれた 正月三が日



参拝者で賑う境内

年末から雪が降り積もり、除雪作業を行いながら新年を迎えた平成十八年とは違い、暖冬の影響か雪もなく、例年より暖かい平成十九年の幕開けとなった。本殿へとつづく階段には、新年を神社で迎えようと午後十一時ごろから列ができ始めた。同十一時四十五分神門が開

かれ、警察の誘導により本殿へ。新年への雰囲気が高まる中、どこからかカウントダウンが始まり、十秒前からは、神門内にいた参拝者全員が数え、午前零時大太鼓が打ち鳴らされると、歓声と拍手が沸きあがった。また本年は、結婚披露宴で腕を振るう「ことぶき会調理部」が、年末年始甘酒やコーヒーなどを販売。参拝者の冷えた体を温めていた。

正月期間中は、よりよく参拝していただけるよう警察やガードマン、金華水防団、交通安全協会といった方々のご協力を賜り事故・ケガなどないように万全をつくした。毎年多くの方々にご参拝いただいておりますが、

今年是一段と多く三が日で六十一万人あまりの方が初詣に訪れた。



参拝者でうめつくされた本殿



甘酒などを販売することぶき会調理部

# 学生アルバイト 心構え学ぶ

正月三が日で六十一万人の参拝者が訪れる当社では、毎年男女合わせて五十名の学生アルバイトに奉仕を依頼しており、奉仕期間中の心構えや応対を学ぶ事前説明会が十二月二十四日開かれた。

白衣・袴に身を包んだ学生らは本殿を参拝。神社の由緒や社殿の名称、期間中の諸注意などの説明をうけ、大晦日には、大祓式・除夜祭に参列後、お札・お守りの名称・初穂料の扱い方を学び、三が日は授与所が十カ所設置される為、境内図で場所の確認をし、新年を迎える準備を整えた。



辻氏より指導を受ける児童

### 抹茶のお味は？ 茶の湯体験

伊奈波神社の氏子区域にある金華小学校では、毎年六年生が総合学習の一環として「茶の湯体験」を行っており、二月十五日、児童三十四名が二グループに分かれ、神社境内にある水月亭で裏千家淡交会岐阜支部辻英治氏指導のもと作法と



所作を説明する辻氏

歴史を学んだ。

同校には茶道クラブがあり、所属する二名が代表で辻氏より直接指導を受けた。その後全員に抹茶がふるまわれると児童達は各自で所作を確認しながら抹茶をいただいた。辻氏は時より注意するも温かく見守っていた。普段正座をする習慣がないためか、痺れに耐えかね体をうごかす姿もみられた。



鉢巻を締め計算する子供たち

暖冬とはいえ、珠をはじく指先は冷たく、時より手をこすったり、息を吹きかけたりする様子もあつた。

### 特大そろばんではじき初め

そろばんの上達を願い、岐阜県珠算振興会主催で学問の神様で知られる菅原道真公を祀る当社天満宮前で『新春そろばんはじき

初め大会』が一月十三日開催された。全国各地で行なわれているのははじき初め。岐阜県では初めて。市内と近郊のそろばん教室に通う生徒ら三〇〇名参加。来賓に細江茂光岐阜市長を迎え、そろばんの上達、学業成就の祈禱が行なわれた。

祈禱後は長さ一・八メートルもあるジャンボそろばん二面を使用し、はじき初めが行れ、七、八名の子供がそろばんに向い、読み上げられる問題を解いていった。

### 扁額奉納祭



謡曲「高砂」を奉納する会員ら

故杉山進七氏(岐阜女子大学創設者)を中心に昭和四十年、当時の岐阜青年会議所謡曲部として発足したみなもと会。四十周年記念事業として神前に謡曲「高砂」と扁額が十二月三日奉納され、関係者ら一〇〇名あま

りの方が参列した。同会は、中国杭州市をはじめ、パリやニューヨークなど海外公演も実施しており、鶴飼の名所として名高い長良川の『長良川新能』は同会の協力もあり、二十年前から行われ、今では、岐阜の夏の夜の風物詩となっている。祭典後、扁額(縦1.2m×横2m)除幕式が行われ、参集殿で謡会が開催された。



除幕式

折れ曲がり使うことのできなくなった針を供養し、今後の上達を願う針祭が、岐阜県和装組合主催のもと二月八日、和裁学校の生徒を始め関係者ら五十名あまりが参列し斎行された。常日頃、



豆腐に針を刺す生徒ら

### 一年間のいがらみお疲れさま

裁縫をしている関係者らは折れ曲がった針に感謝の気持ちを込めて豆腐に一本ずつ刺し、祭典終了後には、主催者の手によって境内にある針塚に丁寧に納められた。



針塚に納める主催者

### 〈針供養〉

関東では二月八日、関西では十二月八日に行うところが多く、古くから事始めと事納めを総括して「事八日」(ことようか)と呼ぶ風習があるが、十二月と二月のどちらを事始め、事納めとするかは一定していないようである。

# 因幡芝居のてまわい

寛 真理子  
(岐阜市歴史博物館学芸員)

今回は、本誌第四号で少し触れた、伊奈波神社前の芝居について取り上げます。写真1・2はいずれも御社宝である伊奈波神社境内図の一部です。1(一八三九年作成)には善光寺の隣に「芝居小屋」が、2(一八五七年作成)には1と同じ位置に檜皮(ひわだ)ぶきらしい大きな建物を確かめることができず。伊奈波神社前は、美江寺観音前とともに江戸時代の岐阜町(今の金華校区)にほぼ当たり(ます)周辺最大の娯楽の場でした。江戸や上方の役者が訪れて歌舞伎を上演し、「因幡(稲葉)芝居」と呼ばれました。

ここでのいろいろな興行については、一九世紀にまとめられた『増補岐阜志略』がくわしく伝えていきます。それによると、延宝四年(一六七六)に宅平という人物が満願寺境内で手芝居・見せ物の興行

を尾張藩から許可されたのが最初です。満願寺は今はありませんが、明治初期の神仏分離まで神宮寺として現在の伊奈波善光寺の東に建っていました。岐阜町の大半を焼き尽くした貞享三年(一六八六)の大火ののち興行は中絶しますが、元禄一〇年(一六九七)に再開し、春秋の彼岸と盆の年三度、人形浄瑠璃もしくは歌舞伎と、見せ物を興行しました(『伊奈波神社志』では元禄一三年のこととしています)。享保二年(一七三六)には大門に板ぶきの水茶屋が建ち、見せ物の興行を許されました。このときに板ぶきの芝居小屋ができたとする論者もあります。しかし、文化二年(一八〇五)出版の『木曾路名所図会』に掲載された伊奈波神社境内図では満願寺境内に板ぶきの建物はなく、カヤぶきかワラぶきの建物が見える

だけです。道をはさんだ向かいには板ぶきの建物が二軒あり、これは写真1で茶店がある位置に当たります。享保二年から文化二年の間に境内の火災の記録はなく、板ぶきをカヤぶきに建て替えることは考えられませんが、享保二一年の記事は、板ぶきの茶屋が建ち、常設の見せ物興行が認められた(ただし小屋は板ぶきではない)という意味かと思えます。

このうち、元文三年(一七三八)に尾張藩領内で芝居が禁止されたときも、伊奈波神社前は特例として許されました。天明元年(一七八一)五月に加納藩士の田辺昆敏(やすとし)は「岐阜因幡において操り芝居興行」と日記に書いています。彼岸や盆をはずれた五月ですから、このころに時期を限らない興行が行なわれていたことが確認できます。天明五年、凶作と飢饉が続くなかで尾張藩領全体に芝居が改めて禁止されたときには伊奈波神社前の興行も中止されましたが、わずか八年後の寛政五年(一七九三)には春秋の彼

写真1に見える「茶店 大黒や友三郎」を指し、嘉永二年には友三郎から久四郎という人物に替わっていたようです。翌日から「裏表忠臣蔵」の稽古に入り、八日から上演したところ大入り満員。仲蔵は給金の心配をしながらも、出演の合間に美江寺町のひいきに呼ばれたり、加納宿の茶屋で舞踊を見せ、その遊女の芸も見ておもしろがつたりして過ごしていました。正月一六日に、団十郎が赦免されたとの知らせが江戸から岐阜に届きます。しかし大入りの興行をすぐ止めるわけにはいかず、一日から二二日まで出演してその夜に岐阜を出発しました。仲蔵らは残って芝居を続けましたが、肝心の団十郎が抜けて見物客も減ってしまいます。しかし三月三日の祭礼までは引き留められ、しばらく芝居をせずに過ごして三月五日から一興行を打ち、四月六日に岐阜を発ちました。この間、祭礼の山車で演じる子ども狂言に稽古を付けていますので、おそらくこの年の祭は一段と上出来



写真(1)



写真(2)



写真(3)

岸と盆の三度に限って再び許可されました。『増補岐阜志略』の記事はここでおわっています。年三度という制限は次第にゆるんできたものと思われ。また、黒野村(現在の岐阜市黒野)の庄屋であった伊藤又右衛門の文化五年(一八〇八)の日記には、領主の陣屋があった切通村(岐阜市切通)に行つた帰りにしばしば岐阜町で芝居見物をしており、因幡芝居が岐阜町周辺の人たちの楽しみとなつていたことがうかがえます。

分)、京都出身の初代團三十郎、江戸っ子の熱烈な支持をえた七代目市川団十郎などがおり、五代目松本幸四郎・五代目岩井半四郎も出演したと伝えます。なかでも七代目市川団十郎出演のときのように、共演した三代目中村仲蔵の自伝『手前味噌』からくわしく知ることができ。大きな目の特徴であった七代目団十郎は、広い役柄をこなし、「歌舞伎十八番」選定や「東海道四谷怪談」の初演などでも知られる、江戸時代の歌舞伎を代表する名優です(天保三年に長男に八代目団十郎を嗣がせて自ら海老蔵と名乗りましたが、ここでは団十郎の名で記述します)。しかし天保一三年(一八四二)に改革令に触れて江戸十里四方追放となり、伊勢や上方などで芝居に出演しました。岐阜に来たのは嘉永二年(一八四九)二月のことで、翌三年正月五日に中村仲蔵が名古屋から合流しました。団十郎が泊まっていたのは「因幡権現の下芝居の隣、大久という茶屋」で、これは

だつたことでしょう。この満願寺境内の芝居小屋は明治初期の神仏分離にもなつて姿を消したのではないかと思われ。それに替わって明治一〇年(一八七七)前後には、かつて岐阜奉行所があった場所(伊奈波神社の北)に末広座、伊奈波善光寺前に国豊座、神社参道入口南に相生座、その西に栄座など、劇場や寄席が次々と建ち、伊奈波神社周辺は新たなぎわいを見せるようになり。このうち末広座・国豊座はやはり「いなば芝居」「稲葉桜町国豊座」などと呼ばれています。これらの建物では歌舞伎だけでなく軽業・手品・講談・落語・演説会などが催され、伊奈波広小路の仮小屋でもさまざまに見せ物が興行されました。しかし、明治二四年の濃尾震災を画期として、繁華街のぎわいは次第に南下し、大正から昭和にかけて柳ヶ瀬が全盛時代を迎えることになりました。

# 伊奈波とホタル

伊奈波神社  
禰宜竹

中基 将

初夏の暗夜、清流に飛び交うホタルは初夏の風物詩として古くより親しまれてきました。近年、自然環境

の変化によりホタルの飛び交う姿を観ることの出来る地域も減少してきている様に思われます。



月に照らされ光をはなつホタル 撮影/岩崎一照氏 写真提供/吉田尚弘氏

ホタルの減少や絶滅の原因は、ホタルの生息環境の破壊や悪化と言われております。すべての原因の背景には、人間社会の様々な要因が絡んでおります。ホタルは豊かな環境のバロメーターで自然環境のやさしさやいっくしみを一番良く知っています。私たちがすばらしい環境をいつまでも守り続けて、ホタルが乱舞する姿が観

られる様にと各地で努力されていますが、觀賞に訪れる人々のマナーが悪ければおのずとホタルの数は減少していくでしょう。地球上に生息するホタルは二千種類と言われ、日本には四五種類が確認されております。また、岐阜県内には八種類のホタルが生息していると

スは葉にとまってオスが接近すると強く発光し、オスを誘います。オスはメスに近づいた後、普段とは違ういろいろなパターンで光を放つメスの関心を誘うような行動をとり交尾します。ホタルの寿命は一週間から十日と言われ、この短い間に子孫を残すためだけに精一杯発光しています。はかなく故にホタルの光は私たちの心を和ませてくれるのかも知れません。ゲンジボタルは千五百万年から五百万年前の間に日本列島に発生・分布し、進化をとげながら、百万年前から日本列島全体に分布を広げたと言われております。ところで、日本書紀(七二〇年頃)の巻第二の神代下に「彼の地には、多に螢火の光く神及蠅聲す邪しき神有り」とあり「螢火」と螢の文字が日本で初めて登場しています。平安時代になると「万葉集」

や「源氏物語」「伊勢物語」などの中に螢の文字が出てきます。まさに豊かな自然の水辺で飛び交うありさまに人々は深く感動したことであろう。

「枕草子」では、「夏は夜。月のころはさらなり、螢の多くとびちがいひたる」と記されているようにいろいろ



見つめ合ホタル 写真提供/吉田尚弘氏

な文献に登場しております。ほとんどが恋歌として詠まれています。江戸時代になりますと、浮世絵にホタルの飛ぶ情景や庶民がホタルに触れる風景が描かれております。江戸時代に唄われたわらべ歌で「ほうほうはたるこい……」と言う唄はよく知られてい

ます。

ホタルの放つ光の違いによって「源氏螢」「平家螢」と命名されたように、源平の戦いを想像させられますが、元気に飛び回り光を放つ「源氏螢」、あまり動かずに光を放つ「平家螢」と名付けられたとも言われています。ホタルの乱舞する姿は古くより日本人の心に溶け込み、初夏の夜のひと時を幻想の世界に誘っ



ホタルの幼虫

てくれるのではないでしょう。伊奈波神社でも七十年程前まではホタルの姿も見られたと聞いております。ホタルを復活させて、境内にホタルが乱舞する姿を参拝者皆さんに観ていただきたいと、平成十五年より環

境整備を進め、平成十六年にはゲンジボタルの乱舞を多くの皆さんに観賞していただくことが出来ました。以来、毎年六月下旬又は七月上旬頃、ホタルの乱舞と雅楽の調べを合わせ「ホタルと雅楽の夕べ」と題し、コンサートを開き、大勢の方に楽しんで頂いております。まだまだ境内に飛び交うホタルの数は少ないですが、今後は人口養殖などでも考え、将来は神社の境内一面にホタルが乱舞し、伊奈波神社のホタルが岐阜の初夏の風物詩になり、多くの参拝者に訪れて頂ける様に努力してまいります。

# 第六十二回式年遷宮 「エンヤ!!」御用材曳き入れ

神宮では、御正殿を始め垣内の全てをお建て替えし、さらに殿内の御装束や神宝を新調して、御神体を新宮へお遷し致す第六十二回式年遷宮が平成二十五年秋に執り行われます。

御遷宮では一万本以上の御用材が必要となり、その御神木を昔ながらに神宮神域に曳き入れる、「お木曳き行事」が御遷宮斎行の七年前に執り行われます。元来、地元伊勢の旧神領にあたる住民だけが奉仕する慣例でありましたが、昭和四十八年の「お曳き行事」より、全国の崇敬者も「一日神領民」としてご奉仕出来ることとなり、当社にても宮司を始め役員総代がご参加され、五月十九日午後、神都伊勢へと向いました。一行は高速

道路を乗り継ぎ三時間程で伊勢に到着、古例に従い、沖合いの波寄せる二見ヶ浦の清渚と知られる二見興玉神社で浜参宮を行い無垢塩祓をうけ、潮風を浴び心身を清めた後、宿泊地鳥羽へと移動、伊勢志摩の風光明媚な美し国ならではの海浜を愛で明日への期待に胸を膨らませながら奉曳に備えた。

翌二十日は、吸い込まれるような青空の下、白装束に揃いの法被、鉢巻姿に身を包み、バスに乗り、午前八時伊勢市宮町の奉曳車出発地に集合したところ、奉曳車の前には幟が立ち並び全国各地からの方々で道路一杯に溢れ、総勢四、〇四六名余の熱気の中、賑やかに結団式が行われた。やがて、



お木曳を終え万歳をする奉仕団

奉曳車より二本の引き綱が伸ばされ、その綱を奉仕者の皆さんがひとしく手に執りあつた、今回の奉曳は、「陸曳き」と呼ばれ、御木曳車に巨大な御用材をのせて運ぶ。木遣子が出発の木遣りを高らかに唄いあげると采が振られ、車は「ブォーン」と独特の「腕鳴り」を轟かせながら動き出した。「エンヤ」「エンヤ」と先導役に合わせ奉仕者は、かけ声のリズムに軽やかに

綱を曳き約八〇〇メートルの道程を奉曳する。さわやかな初夏の風の奉曳である。休憩を挟んで道中もよいよ最後、外宮北御門が真近になると再び「エンヤ」の掛け声は一段と高く町々に響きわたる。鮮やかな新緑のもと神苑に巨大な御神木が無事到着する。どこからも大きな拍手が鳴り止まない。ご奉仕を勤め終えた安堵感や限らない満足感で誰もが爽やかな笑顔に包まれた。神宮より慰労の御挨拶の後、湧き上がるように万歳三唱を行ない、襟を正して奉仕者は御垣内参拝を行った。役員総代の皆様には「一三〇〇年の日本の伝統を今に伝える御大儀にお力添へ出来て大変有難い」と心から喜んで頂いた。お木曳きの感動は、お世話戴いた地元・伊勢奉仕団の優しさと触れ合いをとともに忘れえぬものとなり、何かしら心に込み上げてくるものを覚えてならなかった。

# 新年は どきどき行く



参拝風景撮影

タレントの板東英二氏が出演する東海地区土曜日朝の情報番組「晴れどきどき晴れ」(名古屋CBCテレビ)が、平成十八年十二月二十六日撮影に訪れた。岐阜市の長良川温泉付近の町

並みやお店などを紹介するコーナー『湯けむり調査隊・新年は岐阜の長良川温泉へ』(平成十九年一月六日放送)の中で神社が紹介された。取材当日は、若狭啓一アナウンサーと柏木貴代リポーターが訪れ、参集殿前で、由緒やご利益などを宮司にインタビュー。授与所では、きずな守やランドセル守(防犯ブザー付)などを手にし、説明を聞きながら撮影。特に本年より新たに授与している新みくじ「一言恋みくじ」をそれぞれ引き、その内容に興奮を隠せない様子であった。実際テレビを観て遠方

よりお守りを受けにこられる参拝者もおられ、反響が大いにあった。参拝風景や祈願絵馬と全国でも珍しいお礼参り絵馬に書くシーンなどが撮影された。撮影の合間には、若狭アナウンサーと参拝者が談笑されていた。



一言恋みくじを引く若狭アナウンサー

# 一言恋みくじ



## 当社の職員が文章を考えたオリジナル

「思ったら吉日・ドキドキは恋の始まり」など恋に関する一言が書かれている。内容は五十種類。デザインは十種類(写真)

当社でご祈祷後にお祝いの食事をしていただけますか。「お宮さんで部屋を借りて祝いの食事はできませんか」とのお問い合わせが多数あり、結婚披露宴で腕を振るっていることぶき会調理部の協力によりお祝い料理を承っております。

初宮詣や七五三、還暦祝、結納など大切なひと時を四季を織り成す豊かな稲葉の杜で、ごゆつくりとお過ごし下さい。

**金額**  
会席 八、〇〇〇円より  
弁当 三、〇〇〇円より  
ご予算に応じて承ります。  
(要予約)



## 大切なひと時をおもてなし お祝い料理承ります



模擬結婚式

伊奈波神社参集殿では、九月九日フライダルフェアを開催いたします。

神社での挙式は、ホテルや総合結婚会場にはない、荘厳な雰囲気があります。

模擬結婚式のほか、ポイントメイクやスキンケアアドバイスなどを行ないます。また、今回は話

## 九月九日 幸せな二人の門出をお手伝い フライダルフェア開催

題となった十二単が展示されます。

心より皆様のお越しをお待ちしております。  
(スタッフ一同)

結納のご相談も併せて承っております。



結納飾「松寿飾セット」

## 主な神事案内

七月三十日  
**みそぎ神事**  
茅輪くぐり



夏風邪や疫病などを祓い除けるみそぎ神事並びに茅輪くぐりを午後七時よりおこないます。

水無月の夏越しの祓いする人は、千歳の命延ぶというなり

と和歌を唱えながら茅輪を

## 七五三詣



七五三の時期には、四〇〇人余りの子供達で賑わう伊奈波神社。

数え年で行なうのが一般的ですが、最近では満年齢で

くぐり、太鼓の音とともに大祓詞を幾度も奏上しお祓いします。

平成19年七五三早見表		
	数え年	満年齢
3歳	平成17年	平成16年
5歳	平成15年	平成14年
7歳	平成13年	平成12年

行なう方も増えてきております。ここ数年込み合う時期をはずし、早めに祈祷をされる方も多くなっています。ご祈祷の他に衣裳・着付け・写真を含めた『七五三パック』『七五三きょうだいパック』などもございます。

詳しくは神社までお問い合わせ下さい。

## 正式参拝神社紹介

- 二月二十六日 新潟県 三島南部神社総代会 二十三名
  - 二月二十六日 愛知県 神社庁碧海支部第一班 一三七名
  - 三月七日 神社庁碧海支部第二班 二四五名
  - 三月二十六日 神社庁碧海支部第三班 三五〇名
  - 五月八日 大阪府 太川神社敬神婦人会 十九名
  - 五月十九日 鹿児島県 神社庁遷宮奉賛会 五十五名
  - 六月四日 茨城県 神社庁お木曳き奉仕団 七十五名
  - 六月十四日 神奈川県 鎌倉市氏子総代会 二十六名
- ご参拝有難うございます。

### 各祭典案内(7月~12月)

<b>七月</b>	二四日 黒龍神社祭 (午前十一時) 三十日 松尾神社祭 (午後六時三十分) みそぎ神事 (午後七時)	<b>八月</b>	十四日 須佐之男神神社祭 (午後七時) 笹提灯奉納祭 (午後八時)	<b>九月</b>	十四日 花の挽講社祭 (午前十一時) 十五日 末社祭 (午前七時三十分) 敬老祭 (午前九時) 二三日 忠魂碑慰霊祭 (午後三時)	<b>十月</b>	一七七日 物部嘗祭 (午前十一時) 神嘗祭 (午前九時)
<b>十一月</b>	一三三三 松尾流献茶式 (午前十時) 八七日 明治祭 (午前八時) 七日 峰本宮祭 (午前九時) 下旬 金山神社祭 (午前十一時) 大祓神符頒布始祭 (午後五時)	<b>十二月</b>	一十五日 新嘗祭 (午前十一時) 十五日 御神事 (午前九時) 三三三 天長祭 (午前九時) 三一日 大祓神事 (午後四時三十分) 除夜祭 (午後四時三十分)	毎月 一・一五日 月次祭 (午前七時) 朔日祈禱 (午前七時三十分)			

## 社殿お屋根檜皮葺き替えのぞ奉賛に寄せて

古来より当社は、岐阜の総鎮守の神として広く崇敬されてまいりました。明治以降社殿は整備拡充され、ほぼ現在の社殿の様式に整いました。平成十五年「平成の神社境内大改修工事」に着手し、平成十七年「社務所西館新築」に至りましたが、社殿お屋根の老朽・破損が著しくなつてまいりましたので、檜皮の葺き替えを致したく思います。

就きましては、趣旨にご理解ご賛同頂き、心からなるご奉賛をお願い申し上げます。

なお、ご奉賛いただけます方は、ご住所・ご芳名をご記入頂き、お屋根に上げさせて頂きます。

一口 金 壹千円以上



清雅な、いなばの杜で  
永遠の契を結ぶ

**挙式・披露宴  
受付中!!**

◆結婚式パック  
**¥301,000**  
挙式、衣装、美容着付  
写真含む※税込み

◆おすすめ  
(挙式、披露宴)  
25名  
**¥587,000**  
(税込)  
(1名追加¥11,000)

### 水月亭 月釜予定表

七月 八月 八月 八月 八月 八月  
九月 九月 九月 九月 九月 九月  
十月 十月 十月 十月 十月 十月  
十一月 十一月 十一月 十一月 十一月 十一月  
十二月 十二月 十二月 十二月 十二月 十二月

午前十時より午後三時まで  
一人七〇〇円の呈茶料にて  
奉仕致しております。  
是非ご参集下さい。

### 町内・家庭・会社出張祈禱

秋葉祭・月次祭・宅神祭・初午祭  
地鎮祭・上棟祭・竣工祭・清祓  
方除祭・祖霊祭・神葬祭 等

※お申込みは、参集殿受付又はお電話にて

### 編集後記

神宮式年遷宮を七年後に控え、御用材を曳き入れるお木曳行事に一日神領民として奉仕し、その様子を掲載しております。二十一年に一度行われる遷宮の諸行事に一般の方が奉仕できるのは、このお木曳とお白石持ちだけだと思います。その行事の一つに関われたことは大変光栄なことです。

※題字、詩人野口雨情直筆

### 発行所 伊奈波神社社務所

〒500-1804  
岐阜市伊奈波通り一丁目一番地  
電話(058)261-5151  
FAX(058)261-5153  
(年二回、六月・一月発行)